求め、欲したモノ

彩たか

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年はエルフだった。しかし、青年の名は極東出身を連想させるモノだった。その名は、青年が己の種を嫌悪する証であり、大切な人からの大切な贈り物でもある。――ヒキガヤ・八幡――。これは、そんな青年が英雄譚に出てくるとある〝モノ〟に憧れ、求める話である。

ホントはもっと原作を読み返して細かい設定とか時間軸を正確にしたいと思ってたんですが、生憎時間が掛かりすぎる為断念しました。なので、原作と本作品で設定にズレが生じる可能性がありますが、大きな矛盾にならないような小さなズレは許して下さい。

ぶっちゃけた話をすると、思いつきの作品なので不定期投稿です。次投稿するのがいつになるか分かりません。

誤字脱字、アドバイス、批判等のコメント大歓迎です！

目次

第一話　過去からの目覚め　1
第二話　朝　4
第三話　遠征前日準備　8
第四話　専属鍛冶師　11
第五話　遠征Ⅰ①　14
第六話　遠征Ⅰ②　18
第七話　遠征Ⅰ③　20

第一話　過去からの目覚め

その日、青年は昏い瞳をしていた。
その日、青年は嘆いていた。
その日、青年は失っていたことを知ってしまった。

ようやく手に入れたと思っていたモノ。失ってなるものかと、守ることを決意したモノ。失わないことを、信じて疑わなかったモノ。
血を分けた己の半身とも言える少女は泣き崩れ、目の前に広がる光景の意味することを理解しまいと頭（かぶり）を振り続けていた。開けっ放しの扉から、冷たい風と共にいつの間にか降りだしていた雨が入り、青年と少女を濡らしていく。それでもなお二人は動かなかった。動けなかった。動きたく、なかった。
青年は、Ｌｖ．５となってから久しく忘れていた感情を思いだした。その感情は、もう味わいたくないと思っていたもの。味わいたくなかったらから、強くなった。打ち勝つために。守るために。失わないために。しかし、待っていたのはそんな青年を嘲笑うかのような現実だった。
青年は、何もできなかったのだ。過去に起きたことは、事実を後から知ることしか許されない。その場にいることができないのだ。そして、己の意識が曖昧になり始めた頃、青年は収めることのできない感情の濁流を吐き出すかのように、握りしめた拳（こぶし）を己の顔面へと叩き込んだ。

――――――そうだ。これが、『絶望』だ。

「……」
目が覚めると、俺はベッドではなくソファーの上で寝ていた。寝ている間に汗を掻いたらしく、衣服はじっとりとしていて冷たくなっ

ていた。口の中は乾ききり、ソファーで寝たせいか体の節々が固まってしまい、動こうとする度にパキパキと音が鳴る。そして、夢に出てきた現実を思い出し、起こしかけていた体を再びソファーに預けた。

……クソッ、最悪の朝だ。

俺の部屋は、この『黄昏の館』にある書斎に最も近い場所に存在している。この部屋を俺が使おうと決めたのには三つ理由がある。一つは、読書を好む俺にとって書斎が近いこの部屋の立地が理想的だったこと。一つは書斎が近くに在るということで、この部屋の周りで騒ぐようなヤツが居ないこと。そしてもう一つは、k……

ガンガンガンッ！

……そう、この上の部屋は我が最愛の妹、コマチエルがいる部屋なのだ。というか小町ちゃん？お兄ちゃんちゃんと起きてるから。確かに目覚めが悪いのは認めるけど床を蹴って起こそうとするのやめてね？一度床を踏み抜いた後、壊れないようにとか言って一部ミスリルの床にしやがって。

余談だが、イタズラ心で小町が床を蹴るタイミングに合わせて雷属性の魔剣（特注で作った威力の弱いもの）を使ったら、二週間口を訊いてくれなくなった。まじで死ぬか考えた二週間だった。

小町によって毎日行われるこの蹴りに対して、俺は起きていることを伝える為に氷属性の魔剣（これも特注）を床（てんじょう）に向けて撃ち、床を僅かに凍らせるという反応の仕方をしている。理由は単純で、起きて天井にノックするのが面倒臭いから。そんなこんなで今日も今日とて魔剣を天井に向けて放った直後、「パリンッ」と手の中で魔剣が崩れていく音と感触がした。

なんだか今日は運が悪い。明日遠征があるってのに、ここまで運が悪いと明日の遠征で何か起こっしまうのではないかと疑ってしまう。

「ハァ……また後で買いに行かなきゃなぁ」

特注だから高いんだよなぁ、あれ。

そんなことを考えながら、いい加減湿った服が気持ち悪いので着

替えつつ、俺は遠征の準備で心もとなくなった財布に顔をしかめながら、自分の部屋を後にした。

第二話　朝

部屋を出て顔を洗い、軽く口をゆすいだ後食堂に向かうのが、俺の一日の始まりだ。食堂に着くと、小町と他数名が厨房に並んでいた。

「あ、お兄ちゃんおはよーっ」

「んぁ、あぁ…おはよーさん」

厨房から聞こえてきた元気いっぱいな朝の挨拶に、俺は未だ抜けきらない眠気を隠そうともせずに返事をする。

非戦闘員である小町は【ロキ・ファミリア】の中では料理係を任されている。その中で、小町は朝と夜の担当なのである。

「もう少しで出来るから、もうちょっと待っててねー」

「りょーかい。いつもすまないねぇ」

「もー、それは言わない約束でしょ？……よしっ、お兄ちゃーん、出来たよーっ」

「さいですか」

朝飯ができたらしいので、小町お手製の朝飯を取りにいくと、そこには……

「うげぇ、トマト入ってんじゃん」

赤く、コロコロとした野菜が入ってやがった。

「好き嫌いしないの！子供じゃあるまいし」

「子供大人関係なく苦手なものは苦手なんだよ。お前だって食べられないものくらいあるだろ？」

「無いわけじゃないけど……。でも、お兄ちゃんには好き嫌いせずに食べて欲しいんだ。食べないと、いざって時に大変なことになるかもしれないでしょ？そうなったら…　小町、悲しい……」

「小町……」

そうか、小町は俺を心配して……。

「あ、今の小町的にポイント高ーいっ！」

「チッ」

コノヤロウ。

「ああ！今舌打ちしたでしょ!?信じらんない！」
「ヘイヘーイ、スイマセーン」
「チッ」
「あ、お前今舌打ちしたろ？」
　そんな下らない会話を交わしながら、朝飯の載ったお盆を受け取り机に座る。いただきます、と手を合わせサンドイッチを食べようとしたら小町がテコテコと小走りにこちらに寄ってきた。可愛い。
「どした？小町」
「どした？はこっちのセリフだよ、お兄ちゃん。何かあったの？」
「何かって何？」
「いや、それを小町は訊いてるんだけど……。何か元気が無いというか、覇気がないというか、目が腐ってるというか……」
「おい、最後の明らかにおかしいだろ」
　……ホント、我ながらよくできた妹だよ。こんな風におちゃらけて、表にでないように振る舞ってもバレるなんてな……。
「……あの日のことを、夢で見たんだ」
「っ……！」
　あの日。俺たち兄妹にとって、それを指し示すものは一つしかない。忘れもしない。否、忘れたくても忘れられないあの日の出来事。
「そっか……」
　……。
「……あいつも今頃、オラリオに来て『冒険者』になってんのかな？」
　沈んだ空気を変えようと、会話の内容をあの日既に家から居なくなっていた少年の話に変える。
「どーだうね？あんまり冒険者には向いてないと思うけど。」
「そうだよなぁ……。あいつはまだ、白すぎる」
　俺達とは血の繋がっていない、しかし短い間だったが同じ屋根の下で過ごし、同じ時を過ごした少年。同じ義祖父を持つ、掛け替えのない家族の話。
「小町ちゃーん、そろそろ戻って来てーっ！後十分もしない内に混み始めるから！」

「あっ、はーい！今戻りまーす！じゃあお兄ちゃん、また後でねっ」
「おう、頑張れな」
　他の料理係から戻るよう言われ、小町は急いで戻ろうとする。そんな小町に、いつも通りに励ましの言葉を掛ける。小町はにぃ、っと笑うと再びテコテコと厨房へ戻っていった。やはり可愛い。
　混み始めると聞いたので、俺は少し慌てつつ朝食を食べた。食堂が賑わいを見せ始めたところで食べ終わり、お盆を返して自室に戻った。ついでにトマトはちゃんと食べました。噛まずに。

「あ、……おはよう…ございます…」
　食堂を出ようと、出入口に向かう途中でレフィーヤと鉢合わせてしまった。
「あぁ、おはようさん」
　俺は、もう少し早く食べればよかったと後悔した。だが、やってしまったものは仕方がない。出来るだけ普通を意識して、何でもないように挨拶を返す。
「っ……！」
　しかしレフィーヤは顔を伏せ、早歩きで横を通り過ぎて行った。その時のレフィーヤの顔は、なんともまぁ分かりやすいくらいに複雑な顔をしていた。
「…くくくっ、オメェも嫌われたなぁ。なぁ八幡？」
「……いたのか、ベート。別にいいんだよ、嫌われるようなことをしている自覚はある」
　いつの間にか目の前にいたベートが小バカにするように笑いながら話しかけてきた。それに対して極々当たり前のことだと言って後ろを向く。
　食堂の中はより賑わいを増しており、皆が好き好きに朝食を食べていた。ある者は一人で、ある者はペアで、そしてある者はグループで朝食を摂っている。しかし、一貫して共通していることが一つある。それは、エルフの団員による嫌悪の視線が、俺に向けられていること。

「オメェの考えは嫌いじゃねぇがな。性格と目は嫌いだがな」
「うっせ、ほっとけ」
ベートの悪態を流しつつ、俺は今度こそと自室へ戻った。

第三話　遠征前日準備

あの後自室に戻った俺は、小町の料理当番が終わるまでの間、部屋で久しぶりに『英雄譚』が綴られた本を読むことにした。

木製の本棚が五つほど並べられている俺の部屋だが、そんな部屋にも『英雄譚』だけは本棚の中に存在しなかった。俺は本棚の中から一冊の本（何も書かれておらず、中が縦横五C（セルチ）、深さ七C（セルチ）程くり貫（ぬ）かたもの）を取り出し、中に入っている小さな鍵を取り出す。その鍵を自分の机の右下にある引出しの鍵穴に差し込み、回す。中に入っているのは、これ以上は入るスペースが無いと言わんばかりにぎゅうぎゅうに詰められた『英雄譚』の本達だった。

何故こんな面倒臭い方法を採っているのかというと、単純に恥ずかしいからだ。いい歳して『英雄譚』の中で見つけた、ある”モノ”に憧れていることを知られたくはないのだ。

いくつかある『英雄譚』の中から一つを選び、ソファーに腰を降ろして表紙を捲った。頁（ページ）を捲る度に、義祖父が俺達の義弟となった幼い少年に『英雄譚』を読み聞かせていた光景を思い出す。俺がオラリオに来た理由。全ての原点。それが書かれている本。恥を殺して言うのであれば、俺は『英雄譚』に魅せられているのだ。今も昔も、求めている”モノ”は何一つ変わっていない。

時計の短針が十を指した頃、部屋をノックする音と共に「おにーちゃーん、準備終わったよーっ」と、小町の声が聞こえた。「すぐ行くから門で待ってろ」と伝えた後「了解なのでありますっ！」という意味不明な了承を聞きつつ、四分の一程読み終わった本に栞を挟み、元の場所にしまい引出しに鍵を掛ける。鍵も元の場所に隠し、部屋を出て小町の待つ正門へ向かった。

正門で小町と合流した後、俺と小町はレノアという老婆が店主を務

める『魔女の隠れ家』へ向かうべく、北西のメインストリートへ進んでいた。
「いっつも思うんだけどさ、何で前日ギリギリに武器とか装備を取りに行くの？お兄ちゃん物事を後回しにするのあんまり好きじゃないよね？」
「まぁ、色々理由はあるが、一番の理由は嵩張（かさば）るからだな。予備ならまだしも、メインで使う武器をずっと部屋に置いとくのも邪魔くさいんだよ」
　小町の純粋な質問に、俺もまた純粋に答えを返す。と、北西のメインストリートに入った辺りで、ある提案をを小町にしてみた。
「そうだ、ここまで来たら摩天楼（バベル）に行く前にミアハ様達に会って行くか？」
「あ、そうだね！私もナァーザちゃんに会いたいしっ」
　そんな話をしている内に、俺達は目的地である件（くだん）の店に着いた。

　人気の無い路地裏の奥深くから、さらに階段で降りた場所に存在するこの店は、潰れていると思っても仕方がない見た目をしたしていた。小町には店の入り口で待っててもらう。
「おや、やっと来たかい坊主。あたしゃ待ちくたびれたよ。ひひひっ」
　軋む戸を開けて中に入ると鉤鼻の老婆がこちらを向いてケタケタと笑っていた。
「ハイハイ、すいませんね。レノア婆さん、頼んでた杖を」
「全く、相変わらず可愛げのないヤツだね。ほら、お前さんの杖だよ。」
「ありがとうございます。また来るので」
「魔法石だけは壊すんじゃないよ？あんたんとこのハイエルフが毎回壊すんで、こっちは大変なんだ」
「……善処します」
「ケッ」
　杖を受け取り帰ろうとすると、うちのハイエルフサマの恨み言を言われた。あの人何気に無茶な使い方するからな…。まぁ、俺の場合杖

はあくまでサブだ。メインの武器ではない。だから大丈夫。キットダイジョウブ。

「あ、お兄ちゃん終わったんだ？」
「あぁ。よし、じゃあ中央広場（セントラルパーク）に行く前に『青の薬舗』に行くか」
「おおーっ！」
今日の目的の一つである杖を手に入れることが出来た俺は、小町と共に寄り道をしに行った。

第四話　専属鍛冶師

『青の薬舗』に行きミアハ様達と軽く談笑をした後（二人はいつも通り商品を買うよう勧めて来たが、遠征前ということもありまた今度という形で収まった）、俺達は摩天楼（バベル）の中に支店を出す、「超」が付くほどの程のブランド力を有する鍛冶師（スミス）系ファミリア、【ヘファイストス・ファミリア】バベル支店へ足を進めていた。しかし、俺達の目的地は【ヘファイストス・ファミリア】ではない。厳密に言えば、【ヘファイストス・ファミリア】はあくまで待ち合わせ場所であり、そこで何か武器や防具を買う訳ではない、ということだ。

摩天楼に着いた俺達は階段で三階まで上がった後（のち）、広間の中心に存在する魔石昇降機（エレベーター）を使って四階へ上がる。このフロアから八階まで、【ヘファイストス・ファミリア】バベル支店が貸しきっており、辺りには割りと高値な武器や防具が陳列窓（ショーウィンドウ）の中に飾られている。こういう場所に馴れていない小町は、値札を見ては目を丸くしていた。

近くにいた店員に目的の人物の居場所を訊くと、商品を買う際に使用される応客室に通された。そして中には、会いたかった人物が椅子に座っており、こちらに気付くと吸っていた煙草の火を消し、こちらに笑顔を浮かべてきた。

「お待たせしました。ヒラツカ先生」

「……ヒキガヤ、『先生』は止めろと言っただろう？」

ヒラツカ・静。極東出身のヒューマンであり、前までは特注品（オーダーメイド）の依頼はは完全紹介制（笑）を謳っていたが、現在は俺と直接契約を結んでいる鍛冶師（スミス）である。昔、何故依頼を完全紹介制にしていたのか訊いたところ、「『うちは紹介制なんだ。帰りな』って台詞（セリフ）、カッコよくないか？」と、まるで神みたいなことを宣（のたま）っていた。ついでに、なぜ俺がこの女性を『先生』と呼んだのかと言うと、ヒラツカさんはまだ入りたての団員に武器や防具の鍛錬の仕方を教えているのだ。そしてその団員達がヒラツカさんを『先生』と呼んでいたのを見かけたのがキッカケなのである。

「わざわざ摩天楼まで来てもらってすまないな。店に出すための武器を持ってこなくてはいけなくてね」
「別にいいですよ。そこまで遠い訳じゃありませんし」
ヒラツカさんの工房は、他の鍛冶師達と同じく北東のメインストリートに存在する。本来はその工房を訪ねる予定だったのだが、生憎武器の納期がその日まで。つまり今日までだったらしく、摩天楼で武器を渡すことになった、という旨の手紙が、昨日届けられたのだ。
「じゃあヒラツカさん、頼んでたものを」
ヒラツカさんは「ああ」と頷きつつ、後ろにある荷物から一振りの刀の入った刀袋と、小箱に入った軽装と苦無を小箱ごと取り出し、机の上に置いた。俺は刀袋から刀を取り出し、刀を抜いてみる。
『蛙口(かわずぐち)』。５８階層に出現する蠍型のモンスター、『巨大蠍(ヴェノム・スコーピオン)』のドロップアイテムである『巨大蠍の甲殻』を使用した刀身は黒紅色(くろべに)をしており、刃渡り８０Ｃ(セルチ)におよぶ太刀である。そして、俺がメインで使用する武器である。そして、軽装と共に入っていた三つの苦無の名は、『蛙鳥(かわずどり)』。『蛙口』と同じ素材で作られたそれは、同じく黒紅色をしており、全長３０Ｃ(セルチ)の投擲用の武器だ。
「……よしっ」
俺は刀の重さや握った感触、刃の鋭さを確認すると思わず口角が上がってしまった。
「満足そうで何よりだよ。お金は前もって受け取ってるから、そのまま持って帰ってもらって構わないよ。遠征、頑張りたまえ」
「色々、ありがとうございます。」
俺は刀を刀袋に戻した後、軽装などの入った小箱に布を巻いた。刀袋を肩に掛け、布を巻いた小箱を小脇に抱え応接室を出る。出るときに「これからも宜しくお願いします」と、軽く頭を下げる。するとヒラツカさんは「ああ」と、目を伏せたまま片手を挙げて返事をした。
……まったく、かっこいいよなぁ、あの人は。
「ヒラツカさん、やっぱりカッコよかったね。お兄ちゃんよりもカッコよかった」

「そうだな」
「え、否定しないの？」
「事実だからな」
　空が朱く染まり始めている帰り道、「たっく、これだからごみいちゃんは」と半目でこちらを見る我が妹に少し心を折られながら歩いていると、不意に小町が俺の顔を覗き込んできた。いい笑顔で。
「あ、そうだお兄ちゃん。忘れてないよね？ちゃんと夕御飯の買い出しの荷物持ちををすること」
　そう、帰り道ではないのだ。むしろこれからが大変なのだ。考えて欲しい。足りなくなった分の材料だけと言っても、【ロキ・ファミリア】の買い出しだ。並の量では足らないのは誰が聞いても明らかである。
「……どれくらい持つんだ？」
「んー……、簡単に言うと普通は荷台を用意するくらい？」
「は？お前それどうやって俺に持てと？只でさえ防具で片手を塞がってんのに」
「大丈夫だって。……ほらっ、これだけ大きな風呂敷なら荷物全部入るでしょ？」
「お前ポーチにそんなもの入れてたのか……」
　我が妹に、驚愕が止まらない。
「よーしっ。まずは八百屋に行こーっ！」
　俺は溜め息を吐きつつ、小町に付いて行くのだった……。

第五話　遠征Ⅰ①

怒号と咆哮が、折り重なる様に戦場へ響いている。草木の生えない荒野。その全てが赤茶色に染まっている空間の中、多種族で構成されたヒューマンと亜人（デミヒューマン）の一団は、押し寄せて来たモンスターの群れと戦闘を繰り広げる。小町との遠征準備から、既に数日は経ったであろう現在、俺達【ロキ・ファミリア】は遠征開始から数十回目となる戦闘を始めていた。

「盾ェ、構えぇッ――!!」

号令によって展開された巨盾の壁に、モンスターの剛腕が振り下ろされる。盾を構えていた団員は、歯を食い縛りながら踵（かかと）を地面に埋める。

「前衛、密集陣形（たいけい）を崩すな！後衛組は攻撃を続行！」

目まぐるしく変化し続ける戦況に、我らが団長、フィン・ディムナが矢継ぎ早に指示を飛ばす。既に深層にいる俺達は、上の層では『異常事態（イレギュラー）』や『怪物の宴（モンスターパーティー）』でしか出会えないような、『深層』特有のモンスターの物量に顔を歪めつつ、一匹、また一匹とモンスターを屠っていく。

「ティオナ、ティオネ！左翼支援急げッ！八幡、前方の敵に奇襲を掛けろッ！」

指示を受けたアマゾネスの姉妹が、Ｌｖ．５の脚力をもって疾走し、三匹いた筈のモンスターを一瞬で灰に変える。ティオナが倒す前に何か言っていたが、きっと泣き言か何かだろう。そして俺は、前方に現れた四匹のモンスターの内、三匹に『蛙鳥』を投擲する。一匹は頭を、そしてもう二匹は魔石の存在する胸部を貫かれ、絶命する。残った一匹が驚愕で顔を染めるのと同時に肉薄、反応させる隙すら与えぬ間に『蛙口』で胴を斬り捨てた。

現在相手にしているモンスターは『フォモール』。一匹一匹が大人のヒューマンを軽々と越える巨体をしており、その腕には

天然武器（ネイチャーウェポン）であろう化石の骨に酷似した棍棒型の武器が握られている。そして、その図体のデカさ、物量、棍棒、全てを武器にして、盾を構えている団員達によって造られている防衛線の規模を、少しずつ狭めていた。

「まだかっ……」

俺達前衛組が庇っている後衛組。魔導士や弓使い（アーチャー）が前衛組の援護をしているその中でも、更に中心にいるハイエルフサマは、白銀の杖を水平に構え、その美しく高雅（こうが）な声で呪文を紡いでいた。

【――忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む】

戦場に響く『長文詠唱』。リヴェリアさんが持つ攻撃魔法。その中で、今回発動させるのは恐らく第二階位に位置する『レア・ラーヴァテイン』だろう。術が完成するまでおよそ三十秒。一見すると短い時間だが、こと戦闘となれば隙以外の何物でもない長時間となる。故にその時間を守るのが俺達の役割なのだ。

【至れ、紅蓮の炎、無慈悲の猛火】

紡がれ続ける『詠唱』。完成に近づいていく『魔法』に、持っている武器に思わず力が入る。しかし――、

『――オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオウッッ!!』

「嘗めるな」と言わんばかりに吠えた『フォモール』が、盾持ちの前衛の元へ驀進する。恐らくこの群れの中で一番大きな個体であろう一体が、盾持ちの前衛目掛けて己の獲物によって強烈な一撃を放つ。結果、前衛を吹き飛ばし防衛線の一角を欠落させた。

「――ベート、八幡、穴を埋めろ！」

「ちッ、何やってやがる!?」

「ラウル、後頼むッ！」

「は、はいっス！」

空いてしまった防衛線に、ベートと俺が急行するが間に合わない。防衛線の中に、モンスターにモンスターが侵入していく。クソッ、遅かったかッ！

「ベート、お前はこれ以上侵入させるな。俺は中に入ったモンスターを殺るッ」
「俺に命令すんじゃねェッ！」
悪態をつきつつ、更に侵入しようとするモンスターをベートが蹴殺する。そして俺は、侵入したモンスターを屠るべく疾走したが、既にフォモールが魔導士に攻撃を加えんと獲物を上段に構え、その馬鹿げた膂力を以て身動きが取れなくなった魔導士――――レフィーヤに獲物を振り下ろしていた。
「レフィーヤ!?」
別方向から驚愕の声が上がる。直撃は免れた様だが、レフィーヤの眼前の地面を抉ったその一撃は、衝撃波だけでレフィーヤを殴り飛ばすには十分な威力を持っていた。俺はレフィーヤの元へ向かうべく、己の体弾丸に変える。そしてもう一人、俺と同じくレフィーヤの元へ駛走する金髪の少女を視界に捉える。
「――――ぁ」
『フゥーッ……！』
止めを刺さそうと、転がったレフィーヤの元へフォモールが歩みより、獲物を持った腕を振り上げる。そしてその腕がレフィーヤ目掛けて振り下ろされようとした瞬間、胴と首を斬り分ける二つの斬撃が、フォモールを肉塊へと変える。
「……」
その場にへたり込んだレフィーヤが、金色の長髪をたなびかせる少女――アイズ・ヴァレンシュタインと俺を呆然と見つめる。
「アイズ、八幡！」
前方から、ティオナの歓喜の声が聞こえる。アイズはレフィーヤの無事を確認すると、すぐさま前線へ急行する。って……
「おい、アイズ！あまり前に出すぎるな！」
俺の制止も聞かず、アイズは迫り来るモンスターの群れへと走り去ってしまった。
「ったく、後でフィンに怒られても知らねぇからな……。……レフィーヤ、立てるか？」

行ってしまったアイズに呆れつつ、未だ地面にへたり込んでいるレフィーヤに、一応無事かを確認する。呆然と俺を見つめていたレフィーヤは、ぎこちなく頷く。

「なら結構。いいか？常に周りを観て現状を把握しろ。どんな攻撃でも必ず誰かが守ってくれるなんて保証は何処にもない。それくらい、分かってる筈だ。そろそろ自分の身くらい、自分で守れる様になれ」

「……それくらい……分かってます」

何が起こるかわからない『地下迷宮（ダンジョン）』。そこで自分を守れないということは死に直結する。言外にそれを伝えると、レフィーヤは「分かってます」と、相も変わらず複雑な顔をしつつ立ち上がる。そんな無駄口をレフィーヤと叩いている間に、どうやらリヴェリアさんの『魔法』が完成したらしい。前方で夥しい数のモンスターを切り刻んでいたアイズがこちらへ戻って来ると同時に術が発動する。

「【レア・ラーヴァテイン】!!」

数え切れない程の炎柱が魔法円（マジックサークル）から出現し、広間（ルーム）全体を炎の海に変える。残っていたモンスターは一瞬にして灰になり、炎の存在しないここにまで、熱風という形で威力の凄まじさが伝わる。全員の顔が緋色に染まっていく中で、俺達は、静かに構えていた武器を下ろした。

第六話　遠征Ⅰ②

リヴェリアさんがフォモールを焼き払い、ドロップした魔石やドロップアイテムなんかを拾い終えた俺達は、ダンジョンの中でも貴重な安全階層（セーフティポイント）である５０階層にて、野営を張り休息（レスト）をとっていた。

そんな中、俺はというと一人で黙々と天幕の準備をしていた。べ、別に寂しくなんかないんだからねっ！

脳内でバカな独り言を呟きながら天幕用の布を運んでいると、「ア、アイズさん！」とレフィーヤがアイズを呼び止める声が聞こえた。何やら、さっきの戦闘での礼をしているらしい。アイズの持っていた布地が、レフィーヤの元へ渡ったと同時に、ティオナがアイズに背中から抱きついた。これがロキの言うところの『ゆるゆりしてる』ってやつか……。

準備に戻り、持っていた布を俺と同じく天幕の準備をしているラウルに渡す。新しい布を持ってくるべく、先程の場所に戻るとティオナがさっきの戦闘でのアイズの突撃を批難していた。

……確かに、あれは危険な行動だった。間違いなくアイズは強い。だが、ここは『ダンジョン』。ましてや、その中でも一番危険な『深層』だ。いくら強かろうと、何が起きるか分からないここでは、アイズの命令無視一つで取り返しのつかない事態になることだってあり得る。もしかしたら、パーティーにまで被害が及ぶかもしれない。アイズも自覚しているらしく、「……ごめん」と謝罪を口にする。その言葉を聞きティオナも満足したのか、問い詰めるのを止める。そして、先程と同じ様な『ゆるゆり』した雰囲気を醸し出していた。

「おい、気持ち悪（わり）いから離れろ」

しかし、アイズとのイチャイチャを見せつけられ我慢できなくなったベートが、ティオナを蹴り付けた。ここからはいつも通りの言い合いである。ティオナが文句を言い、ベートが悪態を吐く。それに対して「格好付け！」とからかえば、ベートが顔を赤くしてティオナを追い回す。そんな元気があるなら天幕の準備手伝ってくれません

かねぇ……。

結局あの後ティオネに注意され、言い争いをしながらも二人は準備に取りかかった。アイズはフィンさんに呼び出されたらしく、幕屋の方へ向かって行った。きっとティオナと同じ事を言われたのだろう。そして今は、鼻腔を擽る美味しそうなスープの入った鍋を囲んで、食事を始めようとしていた。

「いっつも４９階層越えるの一苦労だよねー。今日は出てくるフォモールの数も多かったし」

「階層主（バロール）がいないだけマシでしょ」

ティオナが愚痴をこぼし、それにティオネが厄介なモンスターの名前を出す。

「ははっ。とにもかくにも、乾杯しよう。お酒はないけどね。」

そんな会話にフィンさんが小さく笑う。そして、

「それじゃあ――」

『乾杯！』

フィンさんが音頭を取り、団員の唱和がそれに続く。本来誰もが神経を集中させ、一瞬足りとも警戒を怠らないダンジョン探索だが、ダンジョンでは滅多にありつけないご馳走を前に、ある者は羽を伸ばし、ある者ははしゃぎ、ある者はその光景に笑みを浮かべた。

第七話　遠征Ⅰ③

「それじゃあ、今後のことを確認しよう」
食事を済ませ、その後始末も終えた頃、フィンさんがこれからの方針について話そうとしていた。俺達はその話を聞くべく、フィンさんの近くに軽い円を作り、視線を向ける。
「『遠征』の目的は未到達階層の開拓、これは変わらない。けど今回は、59階層を目指す前に冒険者依頼(クエスト)をこなしておく」
……あー、そうだった。そういえばそんなもの引き受けてたなぁ……
「えーっと確か、【ディアンケヒト・ファミリア】からでしたっけ？」
「ああ。内容は51階層、『カドモスの泉』から要求量の泉水を採取すること」
ティオネの確認にフィンさんが頷く。それを聞いたティオナが不満を漏らす。
「ええー!?なんでそんな面倒くさいもの引き受けちゃったのさー」
「報酬は見合うものだったからな。何より、派閥の付き合いを無下にはできないだろ？まぁ私が聞く限り、最初にその冒険者依頼(クエスト)を依頼されたのはヒキガヤらしいが」
そう、俺が遠征用の高等回復薬(ハイ・ポーション)やの万能薬(エリクサー)の用意を依頼しにに行った日、逆に冒険者依頼(クエスト)を半ば強引に依頼されてしまったのだ。
「元凶はテメェかエセエルフ!?」
と、ベートが面倒くさいことこの上ないこの依頼を持ち出してしまった元凶(オレ)に噛みついてきた。
「ま、待て。確かに依頼されたのは俺だが流石に独断で請け負ったりはしない。ちゃんと団長達に相談したっ。よって俺は悪くない」
「うるせぇ！適当にあしらっておきゃあいいものを、どうせ断り切れなかっただけだろッ」
「お前さっきのリヴェリアさんの話聞いてたか？」
さっき派閥の付き合いを大事にって言ったばかりだぞ……。作戦名、『つきあいだいじに』！

「二人ともそこまでだ。そろそろ冒険者依頼（クエスト）の計画を伝える」
　あっはい。
「５１階層には少人数精鋭のパーティーを二組、送り込む。無駄な武器・道具（アイテム）の消費は避け、速やかに泉水を確保後、この拠点（キャンプ）に帰還。質問は？」
「はいはーい！何でパーティーを二つに分けるの？」
「あー、注文された泉水の量が多くてな。『カドモスの泉』で採れる水の量が少ないのは知ってるだろ？量を満たす為には二箇所の泉で回収しないと無駄に時間かかっちまうんだ」
「食糧も含めた物資には限りがあるからのう。冒険者依頼（クエスト）の後、５９階層へ行くためにもあまり時間はかけられん。二手に別れて、効率化というやつだ」
　俺が説明すると、ガレスさんが補足を加える。
　そうそう、時間がかかればかかるほど物資は減っていくだけだからな。冒険者依頼（クエスト）を優先するあまり、本来の目的が達成できなくては本末転倒だ。
「もっと言うと、『カドモスの泉』は大人数で移動できないところにあるからね。戦力の分散は痛いけど、小回りは効いた方がいい。……他に質問は？ないなら、隊（パーティーメンバー）員を選抜する」
　フィンさんが確認を取るが、ティオナの後に質問は上がらず、そのままパーティーの編成に移ることになった。

――――――が、

一班：アイズ、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ
二班：フィン、ベート、ガレス、俺

「どうしてこうなった……」
　アイズやアマゾネス姉妹、フィンさんやガレスさんにベート。ここまでは納得できる。……が、一つ言わせてくれ。なんで俺がパーティーに入ってるのん？

レフィーヤについても色々思うところがあるが、それに関しては別にいい。フィンさんとリヴェリアさんの会話を聞いてたから。ただ、俺は入れなくてもいいだろ……。

という視線をベート達に送っていると、

「あ？ンだよ？テメーも第一級冒険者なんだから当然じゃねーか」

「ラウルでいいじゃねぇかよ。後学の為にも」

「じ、自分っスか!?」

ほら、レフィーヤがリヴェリアさんの後釜なら、ラウルはフィンさんの後釜だし。だから、こういうところで勉強するのもラウルの為になるじゃん？

「テメーが働きたく無ェだけだろ。それにお前ェが引き受けた冒険者依頼だろーが。責任くらい自分で持ちやがれ」

「……はぁー。へーへー分かりましたよー」

「チッ。こいつ……」

ラウルを犠牲にして俺の仕事を無くそうと試みたものの、その夢はベートによって一瞬で砕かれた。己ベート、許すまじ。

そんな風にふざけつつ、改めてこのパーティー編成を見回す。そして一つ、思ったことをフィンさんに伝える。

「フィンさん、一班の編成、ちと怖いんですが……」

「ンー……」

フィンさんも思うところがあったらしく、暫く考え込む。ティオナは能天気狂戦士。アイズは先走り狂戦士。ティオネは化けの皮狂戦士。こんなやつらの手綱をレフィーヤが握れる筈もないことは一目瞭然である。そして思考を終えたフィンさんがゆっくりと顔を上げ、ティオネに一言。

「ティオネ、君だけが頼りだ。僕の信頼を裏切らないでくれ」

「――お任せくださいッッ!!」

あぁ、チョロいなぁ。

流石に皆もそう思ってるらしく、ティオネに皆の半眼が刺さる。ティオナに至っては、「ちょろー」と声に出していた。

こうして冒険者依頼（クエスト）のパーティーを編成し終えた俺達は、数時間の仮眠を取った後、５１階層に向かうのだった。